韋駄天の記

小説家 岡部耕大

48

映画求め伊万里へ

わたしの青春時代には、まだ松浦には高校がなかった。大雑把にふたつの選択肢があった。平戸の猶興館高校か伊万里の伊万里高校である。商家の子どもは伊万里商業高校へ、農家の子どもは伊万里農林高校へ入学した。親の職業で高校を決める、まだそんな時代だった。

わたしは佐賀県立伊万里高校を志望した。県境を越えての越境入学である。松浦には猶興館閥が根強くあった。その派閥へ加わるのが、なんとなく嫌だった。好きな同級生が伊万里高校へ進むという情報も入っていた。永田克子さんである。

いまも、わたしの書斎の机の上の引き出しには、高校時代にわたしの実家の裏山で撮った克子さんと2人の写真がしまってある。わたしはセーターにジーパン、高下駄で丸坊主である。克子さんも私服のセーターとスカートである。

なによりもわたしが伊万里高校を志望した原因は映画である。伊万里には映画館が5館もあった。国際、銀映、太陽、東映や大映である。いま、電話で伊万里高校の同級生松浦慶次さんに確認したから間違いない。松浦さんは中学の校長を勤め上げて、いまは伊万里で悠々自適である。

日活映画から東映映画、大映に東宝、新東宝の映画を上映していた。「用心棒」「にあんちゃん」「野火」「キューポラのある街」「切腹」「座頭市」「悪名」「駅前」のシリーズ物。洋画専門の映画館もあった。「黒いオルフェ」「太陽がいっぱい」。中学時代から汽車に乗って伊万里に映画を見に通っていた。映画ばかり見ていた。どの映画もわたしに強い影響を与えてくれた。

平戸には、まだ橋が架かっていなくて、連絡船であった。交通の便が悪く、映画館もそうはなかったはずである。

松浦駅から汽車に乗り、県境のトンネルを越えて、佐賀県の浦ノ崎を過ぎると心が躍った。自由である。親も親戚も、補導の先生も伊万里の映画館までは流石にうろうろはしてはいなかった。

あの路線は潜龍線といった。あの時代の中学生の流行は帽子のつばを短く切り、かみそりでずたずたに引き裂き、ローソクを垂らす。その帽子をかぶり、ズボンは細く縫った手製のマンボズボンであった。「潜龍線の奴らは悪かった」。いまでも、伊万里の同級生はいう。すまん、悪かった。

東京では、日劇でウエスタンカーニバルが始まっていた。ロカビリー旋風である。ファンはマンボズボンの歌手の名を絶叫し、ステージの歌手の首に抱きついて失神した。失神したファンの女の人も、いまはいいおばあちゃんになっているはずである。そして、お茶の間でテレビを見ながら「いまの若い人は」と嘆いているはずである。繰り返すのが歴史である。

（松浦市出身）